

シカジーニース分子疫学解析 POT キット (C.ディフィシル用) の活用

◎磯崎 可能子¹⁾、嶋田 梨織菜¹⁾、西野 航平¹⁾、山本 玲奈¹⁾、中村 公亮¹⁾、松下 久美子¹⁾、磯崎 将博¹⁾
一般社団法人 天草郡市医師会立 天草地域医療センター¹⁾

【はじめに】クロストリジジオイデス・ディフィシル感染症 (CDI)は抗菌薬関連下痢症・腸炎として発症することが多く、高齢者や重篤な基礎疾患を持つ患者により頻繁にみられる。*C. difficile* は偏性嫌気性菌であり酸素の存在下では増殖しないが芽胞を持ち、芽胞の状態では酸素や乾燥、およびアルコールなどの消毒薬に耐性であり医療環境に長期間生存し続けることができる。さらに糞便と共に排出されるため伝播経路を遮断することは難しく、医療機関においてアウトブレイクの事例がしばしば認められる。今回過去4年間に検出した *C. difficile* のデータ解析を行ったので報告する。

【対象と方法】2019年1月から2022年12月までの4年間に検出した *C. difficile* 100株においてシカジーニース分子疫学解析 POT キット(C.ディフィシル用)を用いて分子疫学解析を行った。

【結果】POT 型の分類は100株60種類に分類され、700-373 という POT 型の株が最も多く10%、次いで826-279と954-423が5%、826-23と946-311が4%、4-319、826-343、852-260と954-375が3%であった。

【考察】今回の解析では院内感染が疑われた POT 値 4-319 という同一 POT 型が3例見つかった。1例目は外科の男性患者から検出され2日後に同一病棟だが別の病室より2例目、その8日後には2例目と同室の患者から3例目が検出された。いずれも高齢の男性で癌の化学療法中で、更に共通の看護チームである等の接点があり、これらが院内感染の要因になったと考えられる。なお、4-319の株はバイナリートキシン遺伝子保有株であった。

【まとめ】CDIの感染管理において主要なタイピング法との相関を見ながら世界的に流行している株と日本の分離株の特徴と比較することも重要である。POT法で行う分子疫学解析は医療関連感染から病院を守る為の抗菌薬適正使用支援チーム(AST)の活動と院内伝播を抑止するための感染管理チーム(ICT)による活動の一助を担っていると考える。
連絡先 0969-24-4111